

話 題 (I)

核 デ ー タ 国 際 会 議

核データ国際会議を終えて

— 4年間の経験 —

(原 研) 五十嵐 信 一

1. 会議の後で

核データの国際会議が無事に終わった。NEANDC第24回会合が原研東海研で開かれた1984年3月に、この会議の日本での開催が提案されたのであったが、それから数えて4年余の年月を要した大イベントであった。会議終了後、外国からも国内からも会議の成功をたたえる手紙や電話を多数いただき、事務局をあずかった核データセンター及び関係者一同大いなる感激を味った。会議全体を通してみても、特に重大な事故もなく、ほぼ予定通りに進行していたので一応成功の部類に入ると自己採点してみたりしている次第である。

先日久しく御無沙汰していた百田光雄先生にお目にかかる機会があり、昔話やら国際会議のことやらをお話し申し上げた。実は、先生には国際会議に是非おいで下さるようおすすめしたのであるが、先生が御遠慮なされたのであった。今年はシグマ委員会発足25周年に当るが、先生は初代の委員長・主査として、当時は夢のまた夢であった国際会議の日本での開催と、そこまでに成長した日本の核データの力とを大変喜んでおられた。

今回の会議は主催者の原研は勿論であるが、協賛者の動燃事業団、理研、電事連、電工会、原産の積極的な協力があつた。会議終了後、お礼の挨拶に伺つたこれらの多くの所で、ともすれば欧米に頼り勝な、核データのような基礎的分野で、国際会議が開けた事への喜びとともに、今後への期待の言葉をいただいた。核データへの新たな認識と言うだけでなく、基礎研究の大切さを改めて問ひかけた国際会議の成果の一つであつたと思つている。言いかえれば、それだけ我々の責任は重くなつた訳である。

さて、冒頭にも述べたように、最初の提案から4年の才月を費して開催にたどり着いた国際会議であるから、その準備期間中に得た知識には多くの捨て難いものがある。今後の役に立つものが多数あると思われるが、このニュースに全部書く訳にも行かないから、詳しくははずれ別の所に書くとして、以下ではそれらの中から幾つかを選んで紹介することにする。ただ、国際会議を開く際にはどんなことに注意しなければならないか、失敗と苦勞の一部も混じえて、なんとなく分つていただけられるように書くつもりである。

2. 開催が決まるまでに

NEANDCの提案を受けてから、シグマ委員会や原子力学会の会合でその話をすると、開くことに賛成の人ばかりで反対を唱える人は一人も居なかった。これには大変気を強くさせていただいた訳で、もしこの時期に躊躇せざるを得ないような雰囲気があったなら、とても今度のような成功は望めなかったと思う。この年の秋にはINDCもNEANDCの提案を支持し、日本での開催が可能かどうか、1985年5月に予定されていたSanta Feでの国際会議までに両方の委員長に回答することを求められた。

そこで、核データセンターとしては原研の関連部課室に協力を要請すると共に、シグマ委員会内に、開催時期、開催場所、会議のテーマ、準備のスケジュールなどを検討する特別小委員会を作ってもらい、Antwerp会議や遮蔽国際会議の時の準備の進め方などを調べた。この特別小委員会からは、主催は原研、時期は1988年5月、場所は東京と言う回答があった。これで国内の研究者の意志は固まった訳で、あとは原研本部と科学技術庁の了承を得れば日本での開催をNEAとIAEAに回答することが出来ることになった。これが1984年10月頃だから少し気が早いと言われるかも知れない。事実、原研本部も科技厅も4年も先の話に確約を与えることは出来ないが、反対はしない、と言う所であった。その後NEA事務局からOECDの日本代表部への問合せなど、内外ともに多少の経緯があったが、Santa Fe会議の前に回答出来ることとしては「日本で開催することには誰も反対していない。これは開催が可能であることを意味する。」と言った程度のことであった。従って、Santa Fe会議でもこの程度のアナウンスがあったに止ったようである。

しかし、いつまでもこのような状態では困るし、次ぎのNEANDC会合（1985年11月）では明確な説明をする必要があるし、NEAの方でも1986年4月の運営委員会に諮る段取りになっている。そこで、1985年の秋には再度科技厅及び原研の関連部課室に説明して回り、ようやく、11月のNEANDC会合では「日本での開催が可能である」と言って良い、と言う内諾を取りつけることが出来た。これでようやく国際的な話し合いに進める足場が固まった訳である。

この間、シグマ委員会の方では準備委員会を設けて、先きの特別小委員会案を更に詳細且つ具体的にし、1986年度に発足を予定している国内組織委員会及び国際プログラム委員会に対処出来るような準備を進めてきていた。

所で、御記憶の方も多いと思うが、この1985年11月には「アジア地域核データセミナー」を原研東海研で開いている。この時、中国から4名の方々が参加されているが、この中国の方々を招くに当っては入国ビザの取得で大変貴重な経験をしたのである。実はこの前年の1984年にこのセミナーを開いたのであるが、この時はこの入国ビザが取れず、大失敗をしてしまった。中国人の場合には、幾つかの方式があるが、最も簡単なやり方として、先づ、日本側で「入国理由書、身元保証書、日程表、名簿（団体の場合）」を作り、本人に送付する。本人は

これらを添えてビザ申請書を在中國日本大使館に提出し、受付番号をもらう。この番号を日本側に知らせる。日本側では本人に送ったものと同じ書類にこの番号を記入して外務省査証室に提出し手続きを終えることになる。こう言うことを知らないものだから中国方ではビザ申請をしたのに向に発給されないと不満を言うし、我々もどうなっているのか見当がつかない有様だった訳である。この時の失敗のおかげで国際会議の折には早目に且つ十分注意して対処することが出来た。とは言っても、中国側の対応にはかなりの戸惑いを感じられ、手紙とテレックスでのやり取りにかなり手を焼いた。

話が少々横道にそれたが、1985年の秋はこの核データセミナーと国際会議の両方を説明して歩いたので、聞かされる方も多少の混乱があったようであった。それはとも角、NEANDCに於いて、「1988年5月に日本で開く」ことを非公式ながら回答出来たので、NEANDCもNEA事務局も安心の顔色であった。もし日本が拒否した場合、引き受け国を探す心配があったからである。このNEANDC会合の直後に私はOECD日本代表部の小倉一等書記官と共にNEA側と会議の形式について話し合ったのであるが、ここでは主催が原研であることは良いとして、NEAが共催（Joint Organizer）の立場を取りたい、と主張した。この意味はNEAが国際プログラム委員会とアドバイザー委員会を作り、招待講演者や議長を選択及び論文選考に大いに力を貸そう、その代り、日本側の都合だけで事を運ぶことなく、NEAの承認の下に会議を運営しなさい、と言うことである。特に、NEAが共催の場合はフランス語も使うことになっており、英・仏同時通訳が必要条件になる。この同時通訳の件は同意出来ないこと、従ってNEAの共催の件も改めて検討することにして、この相談を終えた。小倉さんはこの件を大変心配されて日本の対応のしかたについて種々アドバイスをしてくれた。以後の進展が割合にうまく行ったのは小倉さんの働きかけがあったからであろうと思っている。

先きにも一寸触れたが、この会議はOECD/NEAシリーズの一つであるので、1986年のNEA運営委員会には正式に提案し、承認を得る必要がある。そのために、NEA事務局側も会議運営組織を早く決めたかった訳である。それは即ち日本側の組織を先きに決め、その中でNEAにどんな役割をしてもらうかを定めることである。経緯はいろいろあったが、結局NEAには科技庁と同じ後援（Cooperation）の立場で参加してもらうことにした。こうすることにより、運営組織を原研主導に一本化し、いろいろの混乱を避けることが出来たのであるが、これはNEA側の好意ある譲歩によるものと思っている。

この過程で日本側の運営組織も固まり、先きに述べた各機関に協賛をお願いし、また科技庁とOECD/NEAの他にIAEA、日本原子力学会及び日本物理学会に後援をお願いした。こうして、1986年3月には国内組織委員会が正式に設置され、その下にプログラム調整部会と企画運営部会を置いて実質の準備の段階に入ったのである。日本での会議開催が正式に決ったのもこの時と言うべきであろう。

3. 開幕に向けて

日本での開催が本決りになって先づやるべきことは全世界へのアナウンスである。これには日時、場所、会議の主題、会議の組織などを盛り込む必要がある。国内の組織はすでに決っているが、更に国際プログラム委員会とアドバイザーグループを作る必要がある。内々にはシグマ委員会の準備委員会やNEANDCの事務局（NEAデータバンク）と相談していたので、メンバーの選考はすでに終わっていたと言って良い。国際プログラム委員会委員長には更田豊治郎氏（当時原研東海研副所長）を推せんし、1986年7月に開いた第一回国内組織委員会で承認を得、8月に委員長名で委員候補者に招請状を出して承認を得た。

次に場所を決める必要がある。最初は東京の適当なホテルか会議場を考えていたので、あちこち歩き回って調べたり、交通公社の国際会議担当者に聞いたりして検討したが、適当な所がなかなか見つからなかった。そこで東海村や水戸も対象に加えて探すことにした。そんな状況を国内組織委員会で報告した時、阪大の住田教授から「折角日本で開くんだから、東京のような没個性的な所よりは日本的な地方で開く方が出席者は喜ぶよ」と言う意味の発言があり、私も大いに共鳴したのであるが、さて、場所は地方で良いとして、適当な会場があるのかどうか、全く自信がなかった。水戸プラザホテルの名前もこの会議の席上で出たが、その時はあまり期待していなかった。結局は東京で開くことになるだろうが、参考のために水戸プラザホテルも見ておこう、位のつもりであった。7月末の或る日、核データセンターの深堀君とこの水戸プラザホテルを見に行っただのであるが、行ってみて驚いたことには、会議室の広さ、数、配置が私の想定していたものにほとんど近いのである。東京をあれ程歩き回っても適当な所がなかったのに、期待していなかった水戸にこんな所があるうとは!!

今から思うと、この水戸プラザホテルを知ったことで、準備の方向がそれまでとは全く変って了った気がする。事務局のある原研東海研に近く、ホテル側との連絡が容易であり、ホテル側としてもこのような大規模な国際会議は初めてなので、全面的に協力してくれたし、何よりも、スペースと部屋の配分が極めて良く、ほとんどすべての点で条件が揃い、この上なくやり易くなったからである。

こうして場所も決ったので、第1次案内とポスターを作り、1986年11月にこれらを全世界に配布した。第2次案内ではいよいよ論文募集を行うのであるが、この辺までくると、ようやく国際会議の準備らしくなってきた。招待講演のテーマとか講師候補とかを本格的に決める段階に入る。国内プログラム調整部会ではすでに6月頃に原案を作っていたが、国際プログラム委員会の発足を待って、この原案を各委員に送り意見を求めた。この原案を検討するために、NEAでは欧州の委員をNEAデータバンクに招集し、原案に対するコメントと共に代案を作って送ってきた。米国からもA. B. Smith氏やP. G. Young氏から回答があり、これらを合せると150件の代案及びコメントになった。

これらを取捨選択し、セッション構成や国のバランスなどを考慮して38件の招待講演候補案

を作り、国内及び国際プログラム委員とアドバイザーに送付し、承認を得たのが 1987 年 1 月であった。これを招待講演候補者に送り講演依頼を行い、その返事を待って、多少の修正を行ったが、3 月には 9 分通りの招待講演案が出来上がった。

論文募集を主とした第 2 次案内を配布したのが 5 月末であったが、これにはアブストラクトの表題と仮登録の締切りを 9 月 15 日、アブストラクトの原稿締切りは 11 月 5 日とすることなどを載せた。所が、9 月 15 日までの仮登録申し込み数は 263 件、論文発表希望は 236 件と少なかった。締切日を忘れて人が多いのである。催促状を出してみると、11 月 5 日までは参加希望 292、論文発表希望 301 となり、その後も申し込みがあると言う風であった。しかし、開会まで残す所半年と言うこの時点ではそうそういつまでもお人好しを続ける訳にも行かなくなってきていた。

国内プログラム調整部会の論文選考は 10 月末と 12 月初めに行い、その案を持って、12 月 15、16 日に N E A データバンクで国際プログラム委員会を開いた。日本案では招待講演 35 件、口頭発表 90 件、ポスター発表 145 件とし、口頭発表の時間を 15 分とした。これに対して国際プログラム委員会では口頭発表を減らし、発表時間も 12 分として全体の時間に余裕を持たせること、ポスターを増やすこと、などの意見が出、また国内案を若干組み替えるなどの提案があった。これらを踏まえて、最終案を作り、講演候補者に連絡した。この時点では口頭発表 80 件、ポスター発表 169 件になっていた。

所で、国際プログラム委員会を開くまでにアブストラクトの原稿を事務局に送っていない論文は、その後に原稿を送ってくればポスターに回し、送ってこなければ不採用にすることにした。これに抵触するものの大部分はソ連からの申し込みであった。そのために、国際プログラム委員会の席上で、I A E A の J. J. Schmidt 氏がソ連の口頭発表をもっと増やすことを主張した。しかし、この時点では無理な相談で、とても増やす訳には行かない。そう答えると、Schmidt 氏はそれではソ連に電話をしてアブストラクト原稿を送るように言うから、1 月 10 日まで待ってくれ、と言う。とにかくそれまで待ってみることにするが、採用、不採用は私にまかせてもらうことにした。

Schmidt 氏の電話がどんなものかは知るよしもないが、何んと送られてきたソ連の論文は 30 数件もあり、その大部分は表題登録もしていない全く初めてのものであった。しかも、国際会議のプロシーディングスに載せて欲しい、との添え書きをつけて!! 会場において口頭またはポスターで発表しない論文はプロシーディングスには載せないことにしていたので、論文を送ってきただけでは採用出来ないし、ましてやアブストラクトだけではどうしようもない。結局、Schmidt 氏の努力にもかかわらず、ソ連の論文から口頭発表に採用出来たものは 3 件だけだったのである。多分良い論文も多かったとは思いますが、新しく送られてきたものは全部返却せざるを得なかった。何処かにずれがあるようだった。

これ程ひどくはなかったが、中国にもこれに類したことがあった。この場合は会議当日に論

文を持ってきて発表したい、と言うのである。止むを得ず、ポスターの取り消しがあった所に貼り出すことを許したが、持って来た論文は形式が違うのでタイプし直しをもらった。

話が前後したが、とにかく論文の採否を決め、これを著者達に知らせ、書き直し、組み替えなどの必要なものはアブストラクトを改めてもらうなどしてプログラムを決め、3月に最終案内（第4次案内）と共に配布した。著者の中には、論文が採用されたので旅費を出してくれ、または採用されたが旅費が無くて行けない、という人が数人あった。IAEAが途上国の何人かに援助をしたようだが、事務局にはそのような余裕は全くなく、すべて断った。論文は出席者の誰かに代理発表してもらうように要請し、それが不可能ならプロシーディングスには載らないことを伝えた。この辺りのことがどうももう一つすっきりしない思いが残っている。

いろいろ書いてきたが、登録のこと、ホテル予約のこと、ビザのことなど、まだまだあるが、原稿予定枚数をはるかに越えて了っているので、この辺で会議場に入ってみることにしたい。



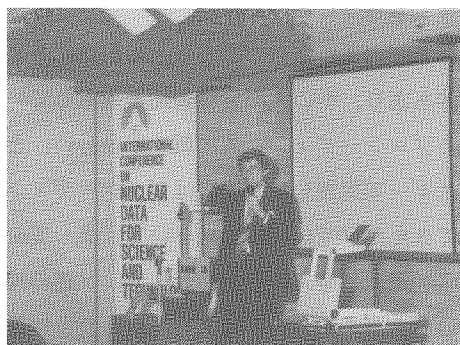
核データ国際会議の会場となった
水戸プラザホテル



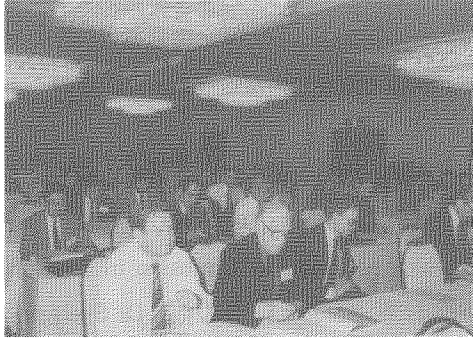
受付



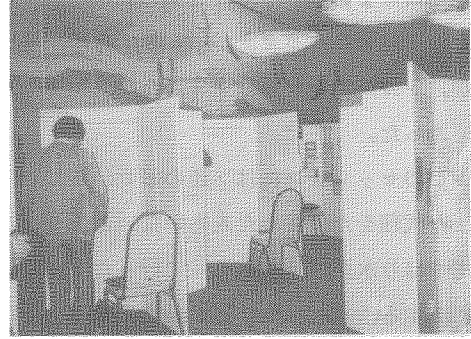
主会場での講演



B会場での講演



講演を聞く参加者



ポスターセッション会場



レセプション



レセプション

4. 幕があがって

会場登録は前日から行るのが普通である。事務局は入念な打合せを行って、登録、入金、論文原稿受付け、等々の分担を決め、5月29日の夕方から登録受付けを始めた。何故夕方からかと言うと、この日は大安で、ホテルでは結婚式が何組もあってごった返えしていたからである。従って、会場設営も夜8時頃から始まって夜中までかかった。とは言え、ホテル側の機動力には本当に感心した。例えば、会議場をレセプション会場に変え、またすぐ会議場に直すのを「どんでん返えし」と言うのだそうだが、この早さは美事であった。結婚式場を会議場にする位は彼らにとっては朝めし前の事であるようだった。ただ、主会場の看板が大きすぎて、照明燈が邪魔になったりはしたが、予想以上に早い会場の作りかえであった。

さて、初日の招待講演一番手はA. B. Smith氏で、Neutron Sourcesの話であった。相棒のS. Cierjacks氏が資料を用意していたが、連絡がつかず、おまけに、Cierjacks氏の到着が11

時頃になるとのことで、とても間に合わず、一枚のトランスベアレンシーを写したままで通したのには恐れ入った。Cierjacks 氏によると、カールスルーエからシカゴに電話を入れたのだが、シカゴ地域が電話ケーブルが火災で2週間位不通状態でどうにもならなかった、とのことであった。

このセッションにはソ連の研究炉についての講演も予定していたが、関係者は誰も来ていず、また代理をたのまれた人もいないということで結局取り消しになった。その代り、この前の週にやはり水戸プラザホテルで行った I A E A の「Physics of Neutron Emission in Fission」に関する Consultants Meeting の報告を、予定していた J. W. Boldeman 氏の他に D. Seeliger 氏にもやってもらうことにし、時間を埋めることが出来た。

会場にいて呼び出されたり、会場に向う途中で呼びとめられたりするのには事務局をあくまで止めている以上止むを得ぬが、一人印象的だったのはハンガリーから来られた A. Lajtai 氏であった。この方は核分裂中性子スペクトルデータの専門家で、前週の I A E A の Consultants Meeting にも出る予定であったが、日程が合わずに国際会議だけに出席を変更した経緯がある。勿論 I A E A の援助を受けて来ていたのだが、往復ともシベリア鉄道を使い、船でウラジオストックから横浜に来て、水戸に来ると言う優雅な旅をして来ていた。所が、私に会って言うことには、「I A E A からの援助が少ないので、今 I A E A にたのんでもう少し金を出してもらおう予定だが、それが駄目な場合は登録費を免除してもらいたい」。そこで、前の週から来ている I A E A の H. Lemmel 氏に頼んでみようと言うとすでに頼んでいて、やはりこの会議に来ている I A E A の V. A. Konshin 部長が良いと言うなら Lemmel 氏が I A E A にテレックスを打つことになっている、とのことであった。

結局は I A E A が援助することになったので良かったが、事務局としては登録費の免除を許す訳には行かないので、I A E A の援助が無かった場合にどうすれば良かったのか、今でも心にかかっている。

参加者の国数が30にもなると、いろいろな背景があるものである。イランの R. B. Akbari 女史の場合はお国が戦時下にあるためか、他の理由からかは知らぬが、制限がきつく、滞在が大変困難であった。しかし、中井洋太氏御夫妻の御好意で、数日間を中井邸に泊めていただき、最後まで会議に出席することが出来た。もし中井氏に助けていただかなかったら、途中で帰国しなければならなかった筈である。

会議の進行は大むね予定通りであった。招待講演の取消しが2件と口頭発表の取消しが4件あったが、これらは予め連絡があって分っていたので混乱はなかった。どこかの国の会議では、講師が時間になっても現れず、セッションのやりくりで慌てる場面がしばしばあるようだが、今回はそのようなことは一度もなかった。これは、副議長にプログラム調整部会と企画運営部会の部会員を主とする日本人を当て、講師との連絡に特に注意してもらったためである。隠れたファインプレーだったと思っている。

会場担当の事務局員及びホテル従業員も良く細部にわたって気を配ってくれた。ただ、少少サービス過剰な所もあって、主会場のヘッドライトなどで講師に強い光を当て、かえって困らせた場面もあった。この辺は講師を俳優と間違えたのかも知れない。

会議も後半になるとややだらけるのが普通であるが、今回はそのような気配もなかった、と思っている。事務局の欲目だけでなく、閉会までほとんどの参加者が残っていた。核データ屋は辛抱強いから、と口の悪い人は言うが、それにしても今回のようなことは異例であろうと思う。

スケジュール外の小会合も幾つかあった。予め事務局に連絡のあったものでは、NEANDCの標準参照データに関する拡大小委員会が火曜日のポスターセッションの時間を利用して行った。また、火曜日の夜には、核データの評価の国際協力について話し合う小グループ会合があった。これは日、米、西欧の間で核データ評価を協力して進めて行こうと言う主旨で、NEANDCの宿題事項になっているものである。木曜日の午後にかかれた放射化断面積ライブラリー作成に関する非公式会合と共に、核データ評価の国際協力を一層促進しようとする世界的風調を示したものと受止めている。

5. 忘れ物

講演の内容について書く紙数はすでに無いので、この辺で筆を置くことにするが、その前に、会議後に不図思ったことがあるので、書いておきたい。

今回の会議が核データの会議としては最も大きく、しかも日本では初めての会議であった。従って、世界の一線級の研究者が多数来たのであるから、彼らと語り合う絶好の機会であったと思う。勿論、個々にはいたる所で討論があり、会議後の招待講演などもあったとは思いますが、何か忘れ物をした思いがあるのは、所謂サテライト会合の類が無かったことである。前述のIAEAのConsultants Meetingはあったが、もっといろいろなテーマで、方々で、20~50名程度の小会議が開けなかったものか、と思った次第である。このような機会が再びあった場合には是非、どなたかに考えていただきたいものである。

この核データニュースが出る頃には、プロシーディングスも出来上ると思う。それを配り終えれば、我々の役目も終ることになる。

(完)